

錢形平次捕物控

竹光の殺人

野村胡堂

青空文庫

一

「平次、狸穴^{まみあな}まで行つて見ないか、竹光^{たけみつ}で武家が一人殺され
たんだが——」

與力笹野新三郎は、丁度八丁堀組屋敷に來合せた、錢形平次を
誘ひました。

「旦那が御出役で？」

「さうだよ。浪人者には違ひないが、土地では評判の良い人物だ。
放^ほつても置けまい」

八丁堀の與力が出役するのは、餘程の大捕物で、いづれは殺さ

れた武家の舊藩きうはん關係に、厄介なこともあるのでせう。

「お供いたします。丁度、八五郎も參つて居りますから」

「さうしてくれると都合が宜い」

笹野新三郎は、錢形平次を信賴し切つて居ります。土地の御用聞は、うるさい繩張のことを言ひ出しさうですが、與力のお聲掛りで行く分には、文句の言ひやうはありません。

櫻は八重、日和も陽氣も、申分のない春でした。竹光で武家が殺されたといふ、煽情せんじやうてき的な事件がなくとも、若くてハチ切れさうな平次は、江戸中を一廻りしたいやうな心持になつて居たのです。

「やつとうの方はいけたんでせうね、その浪人者は？」

平次は道々も竹光の事が氣になつてなりません。

「微塵流みぢんりうの遣つかひ手で、さる大藩の指南番までした人物ださうだ」

「それが、竹篋たけべらで殺やられたんですか」

「變つて居るだらう」

そんな事を言ひ乍ら、三人は芝山内から麻布狸穴あざぶ まみあなへ、ゆら／＼ゆら／＼、街の陽炎かげろふを泳ぐやうに辿つて居たのです。

狸穴に着いたのは晝少し過ぎ、この邊は山の手の盛り場で商ひ家も多く、手輕な見世物や、茶屋、楊弓場などのあつた時代ですが、一步裏通りに入ると、藁葺わらぶきのしもた家が軒を竝べ、安御家人や、浪人暮しなどの人が、さ／＼やかな畑を拵へて、胡瓜や南瓜を育てゝゐると言つた、一種變つた風物が特色でもあつたのです。

「お待ち申して居りました、旦那」

まみあな狸穴のとある家、生垣の前に、土地の岡つ引が待つて居りま

した。狸穴に縁を持たせて鼓の源吉といふポンポンした四十男。

「鼓の親分、私も目學問をさして貰ひますよ」

平次はへり下だつて肩の手拭を取りました。

「宜いとも、錢形の兄あにき哥が來てくれると、俺も心強いといふものだ」

あつさりした口はきゝますが、何か腹の底に蟠わだかまりがないではありません。

「死骸は？」

と笹野新三郎。何處からともなく散り残る花はなびら瓣が飛んで來て、

陰慘な空氣などは感じられませんが、建物に添つて右に曲ると、風の吹廻しか、線香の匂ひがプーンと來て、さすがに職業的な緊張を覚えさせます。

「今朝死骸を見付けたのは、此處でございました」

源吉は狭い庭の沓くつぬぎ脱の上を指しました。一抱へほどの自然石の上は、春の陽に乾いて血潮がベツトリ、もう玉蟲たまむし色に光つてゐるのも不氣味です。

「誰が見付けたんだ」

「私で——」

何時の間にやら、新三郎の後、平次の横手に立つてゐたのは、二十七八の小氣のきいた渡り中ちうげん間風の男です。

「お前は？」

新三郎の眼は少し厳きびしく動いて、この男の全部を一瞬に讀まうとしました。

「奉公人でございます。藤助と申しまして、へエ——」

「——」

「二十七でございます。生れは下谷で、へエ——」

訊きもしない事まで、よくペラペラと饒しやべ舌る男です。

「下谷は何處だ」

平次は此男に好奇心を持つ様子で、横から口を出しました。

「二長町の五兵衛店だなで生れました。町内で訊いて下されば、まだ知つてゐる者があります」

藤助は一向物にこだはりません。

二

家の中は思ひの外小綺麗ですが、浪人生活の不自由さが、疊の古さにも、調度の貧しさにもわかります。それにしては、渡り中間らしい男を一人給料を出して下男に使つてゐたのが腑に落ちません。

死骸は検屍前ですが、土分の扱ひで、庭に轉がしても置けなかつたのでせう、座敷の中へ上げて、床の上に寝かし、形ばかりですが、一と通りのことはしてあります。死骸の側に身も世もあら

ぬ姿で泣いてゐるのは、十八九の娘、——これは、殺された主人
 福島嘉平太の一粒種で、お頼よりといふ美しいの。その側から、慰めなぐさ
 兼ねておろくして居るのは、『小父さん』と言はれる、故人と
 昵懇じつこんの浪人者、跡部満十郎といふ四十男です。

娘お頼の悲歎は見る目も氣の毒でした。天にも地にも、たつた
 一人の肉身は、青竹を削つて、鰐つばと柄つかだけを取付けた、竹光で背
 中から縫はれ、獸のやうに死んで居るのです。

「旦那、氣の毒ですが、傷口を洗つて見なきやありません」
 平次は、笹野新三郎に囁やきました。

「さうするが宜い」

新三郎が目で指圖すると、ガラツ八と平次は、早速たらひ盥ひを持出し

ました。生なまぬる温い湯が一杯、源吉の手を借りて、丁寧に死骸の傷口を洗ひ始めたのです。

殺された福島嘉平太はまだ五十そこく、武藝で鍛きたへた身體は、鐵で鑄いぬ抜いたやうに見事なものです。傷は左肩の下五寸ほどのところ、竹光を着物の上から突つ立てゝ、肉が無慙にはせて居りますが、不思議なことに、竹光を突つ立てた傷の周圍に、二ヶ所ほど、別の軽い傷があつて、それは、洗つて見ると、血がにじんだ様子もありません。

「これは不思議だ、着物の外から搜さぐつて突つ立てたのかい」

源吉は酔つぱい顔をしました。竹光で外から搜つて、三度目に致命的な突きをくれるといふのは、生身なまみの人間を相手には出来ない

いことです。

「その二ヶ所の浅い傷は、血も何にも出ちやゐない。死んでから付けたのさ」

平次は註ちゅうを入れてやりました。

「死んでから竹光を突立てたのかい」

と、源吉。

「鋸のこぎり引きにする積りだつたかも知れない。餘つ程の怨があつたんだね」

「主人は微塵流みじんの達人だつたといふから、まさか竹光で突かれて死ぬやうなことはあるまい」

それは笹野新三郎の當然の疑ひでした。

「刀か槍で刺して、その傷口へ竹光を突つ立てたのぢやございませんか、旦那」

と平次。

「成程」

「この竹光は誰の物か、解つてゐるだらうな」

平次は下男の藤助を顧みました。妙に退つ引させぬ嚴しい調子です。

「申上げて宜しうございませうか、お嬢様」

藤助は、おろ／＼しました。

「あれ、お前、滅多なことを」

お頼よりは涙の顔を擧げて、出来ることなら、藤助の口を封じたい

様子です。すっかり泣き濡れて居ますが、眼鼻立の可愛らしさは非凡で、この娘一人のためにでも、幾人かの人が命を落しても不思議はないでせう。

「隠しちやいけねえ。解つてゐるものならはつきり言ふがいゝ。後で知れると、却つて物事が面倒になる」

平次は、お頼と藤助の二人へかけて言ひました。

「申しますよ、親分。横町に住んでゐる、星野門彌様が、こんな刀を差していraftしやいました。矢張り御浪人で、ヘエ」

さう言ひ乍ら、藤助は何處から搜したか、少し禿さやチヨロの鞘さやを持つて來ます。

「何だ、鞘も捨てゝ行つたのか。念入りなことだな」

さう言ひ乍ら、平次の眼は、側に待機してゐる八五郎の顔をチラリと見ました。

「――」

心得て飛んで行くガラツ八。たつたこれだけの合圖で、ガラツ八は横町の星野門彌とか言ふ浪人のところへ行つて、次の命令が来るまで喰ひ下がつてゐることです。

三

「お嬢さんは、昨夜これほどの騒ぎに氣が付かなかつたので？」
平次は美しい娘を振り返りました。

「赤羽橋の小父さんのところに泊つてをりました。子供達に引留められて——」

「赤羽橋の小父さん？」

「私のところだよ」

路部滿十郎はさう言ひ乍ら續けます。

「私の娘達と一緒に、飛んだ夜更しをして、子刻このつ近くなつて寝たさうだが」

「すると、此家こゝには、殺されなすつた主人が、お前と二人だけであるわけだな」

平次はもう一度藤助に戻りました。

「へエ——、二人つ切りには違ひありませんが、朝まで何にも氣

が付きません。あつしは友達仲間でも冷かしの種になつてゐるほどの寢坊で」

「朝起きて見ると、——」
と源吉。

「雨戸を開けると、沓脱くつぬぎの上に、御主人が死んでゐなさるぢやありませんか」

藤助はゴクリと固唾かたづを吞みます。その時——、
「親分、大變ですよ」

ガラツ八が飛んで來ました。

「星野とか言ふ浪人者はどうした」

平次は何か重大なものを、ガラツ八の顔から讀んだ様子です。

「二三日大熱で、身動きも出来ない病人ですよ」

「病人？」

「町内の本道——本田良全りやうぜんさんが來てゐるから嘘や假病けびやうぢやありません。二年前から、ほんものゝ病氣で——」

ほんものゝ病氣と言ふのが可笑しかったか、平次と笹野新三郎は顔を見合せて苦にんがりとしました。

「それは飛んだ命拾ひだ。——病氣でなきや、どんな疑ひを受け
たか知れない」

と平次。

「尤も妹が一人居ますよ」

「幾つだ」

「二十一二で、滅法良い新造で——」

「馬鹿野郎ツ」

ガラツ八はたうとう馬鹿野郎を喰つてしまひました。

「親分さん、——萬一ですよ。萬一それが假病だつたら、大變なことになるですよ」

藤助が横から口を出しました。

「何が大變なんだ。言つて見るが宜い」

と笹野新三郎。

「あの方と、此處の御主人とは元同じ藩中で、——あの方は、御主人を仇のやうに思ひ込んでゐる様子でございますが——」

藤助はよくく口數の多い男でした。

「仇？——それはどう言ふわけだ」

「詳しいことは解りませんが、餘つ程怨があるやうで——」

笹野新三郎はその答が不満足らしく、振り返つて、平次の顔をチラリと見ました。が、平次はそんな話には大した興味も感じないらしく、狭い——と言つても、茄子の二うね位は作れさうな小さい畑の先、丁度隣の板塀の前に植ゑた、厚いまばが疎らな生垣のあたりを見て居りました。

「旦那、變ぢやございませんか」

「何が？」

笹野新三郎もさすがに平次の疑ひの原因には氣が付きません。

「今朝、その邊を歩きやしなかつたかね、鼓の親分」

平次は狭い畑のあたりを指し乍ら、鼓の源吉に訊ねました。

「いや、誰も」

源吉はすっかり平次にリードされて、自分の意見を樹てる工夫もない様子です。

「昨日の朝雨が降った筈だ。——畑の端つこにある、生垣のところで
ろまで行つた足跡が澤山あるが、——おや／＼、庭下駄と跣足と
滅茶々々に入り亂れてゐる」

平次は庭に降りると、足跡を辿つて、生垣の側まで行きました。

「誰だか解るか、平次」

と縁側から笹野新三郎。

「庭下駄は殺された主人ですよ。——まだ物の芽も何にもない畑

へ入らないやうに、用心して歩いてゐるのは、この畑を作つた人でなきやありません」

昨夜のやうな闇の濃い晩にも、空つぽの畑を踏まないやうにして通るのは、畑に對して特別の愛情を持つたものでなければならなかつたでせう。

「^{はだし}跣足のは？」

と新三郎。

「此處へ來いツ、藤助」

平次はそれに應へず、いきなり下男の藤助を呼付けると、その手を取つてグイ／＼と引きました。

「親分、何をなさるんで？」

「跣足になれ」

「――」

「ならないか。野郎ツ」

「へ――」

「この足跡の側へ、手前てめえの新しい足跡を付けるんだ。――馬鹿野

郎、右だ、左ぢやねえ」

平次は峻しゅん烈れつでした。藤助の襟髪を掴んで、古い足跡に並べ

て付けさした足跡は、大きさも形も、何も彼も符節を合せるやうに同じものだつたのです。

四

「あッ、この生垣いけがきの濡ぬれてゐるのは、どうしたわけだ」

鼓の源吉は氣が付きました。

「濡れてゐるのは其處だけだ。——懷紙で其邊の木の葉を拭いて見るが宜い」

平次はそれ以上の事に氣が付いてゐる様子です。源吉は大急ぎで——濡れ残る生垣が、咄嗟とつさの間に乾くのを恐れでもするやうに、一握りの懷紙を生垣の中に突込み、滅茶々に濡れた木の葉の間を搔き廻すと、

「あッ」

紙はあるかなきかの、薄桃色うすもいろに染められるではありませんか。

「主人は其處で殺されたのさ。跣足男がその死骸を引つ擔いで來た。——それは間違ひのないことだ。跣足の足跡が、——往きは淺くて歸りが深い。——死骸を引つ擔いだ爲だ」

何と言ふ慧眼、けいがん——が、斯んな事は平次に取つては朝飯前のことでせう。

「何だつて、あんなところへ連れて行つて殺したんだ」
と笹野新三郎。

「そいつが判れば——旦那」

平次は考へ込んでしまひました。

兎もすれば逃出しさうにする藤助を、ガラツ八の馬鹿力に預けて、平次と源吉と、それから笹野新三郎は、家の四方をグルリと

一廻りしました。

何の變つたこともありません。が、たつた一つ、藁屋根の頂點に、何處から飛んで來たか、蟲喰ひの稽古矢が一本、天矢が落ちて來た恰好に、篋深く突つ立つて居るだけ。

平次は併しそれに見向きもせず、門から出ると、いきなり生垣の向う、板塀繞らした隣の家へやつて行きました。

「御免下さい」

「ど——れ」

響の音に應ずるやうに、物々しい返事と一緒に戸口の障子を開けたのは、四十五六とも見える青髯の武張つた浪人、門札を見ると、岩根半藏と唐様の四角な文字で書いてあるのも人柄が忍ば

れます。

「お隣に、飛んだ騒ぎがありまして、お邪魔しますが——」

「福島様に間違ひがあつたさうだな」

岩根半藏といふ隣人は何も彼も心得てゐる様子です。

「お氣の毒なことでごございました。ところで、何かお氣付きのこととはございませんか。昨夜から今朝へかけて、物音とか、人聲とか——」

「氣が付かん。——尤も俺は名題の寢坊だし、奉公人といふものが居ないから」

岩根半藏はニヤニヤします。覗くともなく見ると、成程たつた二室の淺間あさまな住居で、雇人などを置く場所があらうとも思はれま

せん。

「平常、お隣ふだんとのお附合はございませんか」

「ないなア」

「お隣同志で、顔が合へば口をきくとか、挨拶するとか——」

「俺は——死んだ人の事を悪く言つちや濟まんが、あの、福島嘉平太といふのが大嫌ひでな。高慢かうまんで頑固ぐわんこで、けちで」

「——」

死んだ人の事を言つちや濟まぬと言ひ乍ら、これまた齒きぬに衣着せぬ物の言ひやうです。

「藤助と言ふのを御存じで？」

「よく知つてゐるが、あれは人間の屑くづだ」

「へエ——」

「呑む、打つ、買ふの三道變だ。——福島といふ人、弱い尻でもなきや、あんやイヤな奴を使つてゐる筈はない」

言ふことに一々棘とげがあります。

「お隣の御主人とは以前から御存じで？」

「左様、懇意ではないが知つてはゐる」

これ以上は何を訊いても解りさうありません。

五

竹光の持主、星野門彌の家はみじめでした。主人の門彌はまだ

二十五六の青年武士ですが、散々の貧苦の上、二三年此方の重病で、衾の裏まで剥はがして賣る有様、妹のお雪は二十一二のすぐれた容きりやう貌ですが、これも、尾羽打枯して見る影ありません。

「御病人があるさうで、お氣の毒なことですが、——」

平次もこれ以上のことは言ひ兼ねました。九尺二間の豚小屋にも劣る陋ろうをく屋に、病人の兄と二人住む妹の美しさ。

「お耻しうございます。兄はこの通りの病氣で、この二三日は枕も上がらず——うつら／＼と高熱にうなされて、申すことも判然いたしません」

引つ詰め髪をかき上げて、お雪は泣き濡れて居りますが、貧苦にしひたげられ乍らも、品のよさは蔽おほふべくありません。

「少し聴きたいことがあるが、——ちよいと其處まで、お顔を」

「ハイ」

平次の後に跟いて、——後に残る兄の容態を氣にし乍らも五六間路地の外へ出ました。

「福島嘉平太を御存じで？」

「存じて居るところではございません。三年前まで、同じ家中でございました」

「何？ 同藩？」

「さやうでございます」

「岩根半藏といふ人は？」

「あの方も同藩でございます」

「それはく」

三人共同藩と聽いて、平次も開いた口が塞がりません。それを氣振けぶりにも現さなかつた岩根半藏はどう言ふ考へだつたのでせう。

「三年前まで、西國さいこくのさる大藩に仕へ、福島様は勘定方、私の

兄は御金藏の番人をいたして居りました。——或晚、風雨に紛れまぎ

て賊が入り、御金藏から、新鑄未刻印しんちうみこくいんの小判三千兩と御家の重

寶二品三品盗み出して逃げうせ、その爲、盜賊詮議といふ名義で、

福島様も私の兄も永の暇いとまとなりました」

「——」

「兄は福島様を疑ひ、福島様は兄を疑ひ、二人は力を併あはせて盜賊を詮議する氣もなく、互に跡をつけ跡をつけられて、當江戸表へ

参り、御當所狸^{まみあな}穴に住み付いて、お互に見張つて居ります。御金藏の鍵は三つ、一つは殿御手筈^{てばこ}に、一つは福島様手許に、一つは兄が持つて居りましたので、お互に疑ひ合ひ、見張り合ふのも無理はなかつたのでございます」

お雪の話は奇つ怪ですが、さう説明されると、仇同志がお互に離れることもならず、互に疑ひ合ひ、互に憎み合ひ、互に見張り合つて、三年越し暮した事情も呑込めないことはありません。

「福島様は幸ひ御裕福で、三年経つてもお困りの様子もございませんが、私共は御覽の通りの有様、その上兄の病氣で、何も彼も賣り盡し、耻かし乍ら、刀の中味まで、竹篋^{たけべら}に代るやうな淺ましい此の頃でございました」

平次は慰め兼ねました。

「ところで、岩根半藏といふのは？」

「福島様の御友人で、その頃國許を退轉した方でございます」

これ以上のことはお雪も知りません。平次は、兎にも角にも、^{なだ}宥め勵まして引揚げる外はなかつたのです。

六

福島家では笹野新三郎の許しを受けて、^{とむら}葬ひの支度に取かゝりました。

美しい娘のお頼^{より}は、あまりの事に泣いてばかり居る有様で、跡^{あと}

部満十郎とべが何も彼も一人で引受けて仕事を運ぶ外はありません。

「跡部さん、忙しいところをお氣の毒ですが」

「いや、一向構はないが——」

跡部満十郎は平次の望むがまゝに、手をあけて物蔭へ来てくれました。

「變なことを伺ひますが、福島家は裕福でせうか」

「不思議なことがあるものだよ、私も福島家には三年五年食ひつなく金があるものと思つて居たが、主人が死んで見ると本當に百たぐはの貯へもないことが判つた」

「へエ——」

「費用萬端、私が立換へてやつて居るが、こんなに驚いたことは

ないよ」

跡部満十郎は本當に驚いてゐる様子です。

「旦那と此處の御主人とはどんな係り合ひで？」

「何でもないよ、たゞ同藩だつたし、稽古所で私の娘共も、お頼殿と別懇べつこんにしてゐたし、それに私と福島殿とは碁敵ごがたきだつたか

らな。——性が合ふと言ふものか、他人のやうな氣がしない、お頼殿さへその氣なら、此後は私の家へ引取つて、娘共の姉分になつて貰はうと思つて居るよ」

「旦那の御配偶はいぐうは？」

「ないよ」

跡部満十郎の顔は一寸翳かげりました。四十前後と言つても、氣の

若さうな、正直一途らしい人物です。

それから、お頼にもう一度逢ひましたが、たゞ泣くばかりで何の取留めありません。尤も、成熟し切つた十九の肉體は、申分のない美しさと優しさに恵まれて、少し氣性の弱々しいのさへ、却つて魅力になると言つた肌合の娘でした。

それから、最後に、もう一度藤助。

「此野郎は何べん逃げ出さうとしたかわかりませんよ、——主殺しは此奴ぢやありませんか、親分」

見張りのガラツ八は、すっかりむくれて居ります。

「今にはりつけばしら磔柱を背負はされる野郎だ、好きなやうに暴れさせるが宜い」

藤助も、平次の言葉には、魂を冷しました。

「親分、そいつは情けねえ。あつしは正直者で、主を殺す人間か、人間でないか、誰にでも訊いて下さい」

「訊かなくなつていゝ、手前てめえの荷物を見せさへすりや」

「お安い御用だ、親分、——その押入の中にある柳行李やなぎがうりと風呂

敷があつしの世帯。はゞか憚り乍ら錦の小袖も、絹の褌ふんどしもあるわけぢや

ねえ」

「よしゝ、その風呂敷や行李は見たかねえ、俺はこの部屋に用事があるんだ」

手頃まきの薪を一本持つて來た平次は、部屋の天井板を一枚々々叩いて居りましたが、やがて押入へもぐり込むと、新しく貼つた壁

張の紙を引つ剥し、壁を少し叩き落して、十枚ばかりの小判を持つて、埃ほこりだらけになつて出て來ました。

「見ろ、藤助、御主人は百も持つちや居ねえのに、奉公人の手前は十兩といふ大金を持つて居るぢやないか」

「親分、そいつは給金を貯めたんだ、やましい金ぢやねえ」

「年に四兩の給金を、そつくり二年半貯めたといふのかい」

「少しは手なぐさみもしますよ、親分」

「まア、宜い。兎に角、昨夜主人の殺されたことゝ、此家こゝには小粒一つないことだけは確かなんだ。奉公人が十兩の大金を持つて居て、不思議か不思議でないか、お白洲しらすで言ひ開きをするがいい」

「親分、そいつは無理だ。昨夜主人を殺して盗つた金が、そんな

埃だらけな紙の中に貼り込んである筈はねえ、——そいつは糊のりがよく乾いて居る筈だ」

藤助は思ひの外筋の立つたことを言ひますが、平次は取り合ふ色もなく、

「八、その野郎を番所へ引つ立てゝ行くが宜い、逃しちやならねえよ。それから、後で少し働いて貰ひたいことがある。屋根の上の矢を抜いて貰ひてえのだ、——小判は俺が預つて行くよ、藤助」
平次は残るところなく手配して、笹野新三郎と一緒に引揚げました。

「旦那、大變なことになります」

「何だ、平次、大層脅かすぢやないか」

翌る日の朝、錢形平次を迎へた笹野新三郎は、好奇心と職業意識でハチ切れさうでした。

「何から申しませう、——先づ、あの下男の藤助の匿^{かく}して居た小判十枚は、皆んな贋物の未^み刻^{こく}印^{いん}小判に、素^{しろ}人^{ろうと}が偽物の刻印をタガネで打つた物でございますよ」

「それは大變だ」

未^み刻^{こく}印^{いん}小判に、偽刻印を打つといふのは、偽金を造ると同じことで、これは磔^{はりつけ}刑^{けい}ものです。

「それから、もう一つ、あの藤助と言ふ野郎は、下谷二長町の鑄^い掛屋^{かけや}の倅^{かけ}ですよ」

「何？」

「こいつは近頃の大捕物になりますが、組子の用意をお願いいたします」

「何人位？」

「相手の腕が判りませんが、まア、十人もあれば」

「そんな事で大丈夫か」

「あんまりお膝元を騒がせるものでもありません」

用意は疾^{しつぷう}風^{じんらい}迅雷^{しんらい}でした。錢形平次が捕^{とり}頭^{がしら}で、手下の組

子が十人、わざと眞晝を選んで、八方から一舉に岩根半藏の浪宅

を圍んだのは、それから一刻ばかり後のことです。

「御用ツ」

「岩根半藏、神妙にせいツ」

一隊は表の入口から、一隊はお勝手から、一舉に疾風の如く飛込んだのです。

「えツ、何を馬鹿なツ、御用呼ばはりをされる覚えはないツ」
起ち上つた岩根半藏。

「御用ツ」

正面から飛付いた一人は、半分食ひかけの、晝飯の茶碗をめつぶ目潰しに叩き付けられてのけ反りました。續く一人は、額で番茶の土瓶どびんを打ち割り、うしろの一人は、一本背負ひでモンドリ打たせ

られます。

「其方共に縛られる俺ではない、寄るな、寄るなッ」

早くも引抜いた一刀、バラリと一文字に拂ふと、續く二三人、
うすで薄傷を負つて將棋倒しに――。

「御用ッ」

「神妙にせいッ」

あとは僅かに二人三人、それを冷たい笑にゑみあしらつて、岩根半藏ズイと外へ出ます。廣いところへ出さへすれば働きは自由自在、こんな捕物陣位は、一瞬にして踏み潰せると思つたのでせう。

「岩根半藏、逃げる氣か」

正面へ立たちふさが塞つたのは錢形平次でした。生れ乍らの精氣五體

に充ちくゝて、非凡の使ひ手岩根半藏の前に、莞爾としておくれる色もありません。

「平次か、——無駄だ、——俺は其方などの手に了へる人間ではない」

りうと白刃が眞晝の陽を剪^きつて、錢形平次を鼻であしらひます。

「御金藏破り、福島嘉平太殺し、觀念せい」

平次も一歩も退^ひきません。

「何？ 御金藏破りは判つて居るが、福島嘉平太殺しは俺の知つたことではないぞ」

「神妙にせいッ」

「磔^{はりつけ}刑も梟^{さうしゅくび}首も覺悟の上だが、覺えのない罪までは背負は

ぬぞ。——兎に角、今はまだ縛られたくない。あばよ」

パツと飛ぶのを、平次の十手は後ろから無手むずとその肩を押へました。

「えッ、命知らず奴ッ」

振り返つた一文字の切り拂ひ、平次はサツと飛退くと、十手は左手に、右手は早くも懷をさぐつて得意の投錢。

「汝おのれッ」

一つは振り冠つた拳こぶしを叩かれ、一つは眼の下を、一つは鼻の上をしたゝかにやられて、岩根半藏さすがにたじろぎました。

「御用ッ」

續いて飛付く十手、左手業乍ら、半藏の一刀を絡からみ取つて、痛

烈に體當りを一つ。

「あッ」

縄はもう、その手首に掛つて居りました。

八

「親分、何を考へて居るんです」

ガラツ八の八五郎は、慰め顔にやつて來ました。藤助と岩根半藏が縛られてから五日、平次はこれ程の手柄にも慢まんずるところか、神田の家に引籠つて、人に顔も見せなかつたのです。

「大縮尻おほしくじりだよ、八。福島嘉平太を殺したのは、どうも岩根半藏

ぢやねえ」

「それは又どう言ふわけで？ 親分」

ガラツハは膝を進ませました。

「成程、三千兩の小判は、岩根半藏の家から出て來た。藤助の拵へた偽刻印まで捺してある、——金藏に入つて小判三千兩と、寶物を盗んだのは、岩根半藏に相違あるまい。福島嘉平太はそれを嗅ぎ付けて跡を追ひ、星野門彌は嘉平太を疑つてそれを追つた」

「——」

「狸^{まみあな}穴に落合つて暮すうち、福島と岩根は折合をつけた。藤助

といふ鑄掛^{いかけ}の心得のある下男にタガネを拵へさせ、未刻印小判にタガネを入れて、三千兩を半分づつわけることにした、——それ

は岩根半藏も白状してゐる」

「――」

「所が、岩根は福島嘉平太に半分やるのが惜しくなつた。藤助をわるだく悪企みに引入れて藤助に五十兩か百兩の手間をやつて、福島嘉平太を殺し、三千兩一人占にする事を考へた」

「――」

「稽古矢に火口と硫黄いわうをつけて飛ばし、屋根の上に射込んで、福島嘉平太をおびき出し、屋根の上の怪し火を見窮みきはめるところを生垣立と板塀越しに、槍で突き殺し、その死骸へ、星野門彌の刀を盗んで来て、突つたてることまで考へた。――これは多分半藏のわるぢゑ悪智慧だらう。九尺二間の星野門彌の家から、大病人の目を盗ん

で刀を持出すことは何でもない、門彌兄妹と嘉平太の睨み合ひは町内で知らぬ者もない」

「――」

これだけの事は、藤助と岩根半藏の白状で、ガラツ八もよく知つて居ることです。福島嘉平太と岩根半藏は、甲乙のない使ひ手で、正面から切り結んでは、何方が勝つとも判らないので、板塀の隙間から、生垣越しに突くことを考へたのは、まことに底の知れない悪智慧だつたのです。

「合圖の矢は屋根に落ちた。ほくち火口と硫黄はポツポと燃えてゐる、

――あの晩藤助は主人の福島嘉平太をおびき出し、生垣にピツタリ身體をつけるやうにして、屋根の上の怪し火を見せた、後ろか

ら槍の穂先が出て、一寸一分の狂ひもなく、福島嘉平太の心の臓くつねを貫いた。——藤助は豫ての打合せの通り死骸を引つ擔いで沓くつね

脱ぎの上に置き、水を一手桶持出して、生垣を洗つた、——そつ

と横町の星野門彌のところへ忍び、大病人の枕元から刀を盗んで來た。——それが竹光と後で氣が付いた時は追付かない。死骸の着物の上から三度も四度も竹光を通して、漸く槍で突いた創口をさぐ搜り當てた」

「——」

「ところが八、困つたことにはあの晩、岩根半藏は自分の家に居たのだよ」

平次の悩みはそれだつたのです。

「それはあつしも聴きましたよ。でも、半藏が嘘を言つてるのかも知れないぢやありませんか」

と、ガラツ八。

「嘘ぢやない、多勢證人がある。夜中に脱出して來られる筈はない」

「でも」

「半藏は磔^{はりつけ}刑も覺悟して居るんだぜ。一人や二人殺したのを隠す筈はない、これは矢張り下手人は外にあるに違ひないよ」

「――」

「第一岩根半藏が自分でやつたのなら、血だらけな槍を自分の家の床下に投り込んで置く筈はない」

「――」

「藤助と半藏の相談を盗み聴きした奴の仕業だ、――どうかしたら、福島嘉平太を殺すのを、半藏がいやになつたと見抜いた奴の仕業かも知れない。いづれにしても、福島嘉平太に深い怨のある奴の仕業だ。たゞあの晩、岩根半藏が家に居たのを知らなかつたのだ。――」

平次は黙りこくつてしまひました。いやな事を思ひ出した様子です。

「親分、あの娘ぢやありませんよ、――あの娘なら、殺したら、殺したと名乗つて出る筈ぢやありませんか、金藏破りとそれに荷^か擔^{たん}した奴が知れたんですもの」

ガラツ八はやつきとなりました。

「誰の事を言つてるんだ」

と平次。

「親分は、門彌の妹のお雪を疑つて居るんでせう」

「いや、違ふ——こんな事はない筈だが、人間の心は恐ろしい。

あの火口ほくちと硫黄いわうをつけた稽古矢を、飯倉か巴ともゑちやう町の弓師に見せ

て来るがいゝ、——誰あつちが詭あつちへた矢か解るだらう。それから、近頃、

どうしたことか、お頼よりを跡部満十郎が引取つてゐるさうだから、

それも捜るんだ——」

「え、親分、それはまたどうして——」

「なあに、女房が居なくなつて娘達ばかりだから、跡部満十郎が

お頼をひきとつたのだらう。それに頼みがもう一つ」

平次は何か言ひかけましたが、

「そいつは俺が當つて見よう。頼むぜ」

一人のみ込んで飛出しました。

九

人間の心の恐ろしさを、此時ほど平次も覺^{さと}らされたことはありません。

矢を誂へたのは意外にも跡部満十郎、そして近頃跡部満十郎に引取られたお頼は、満十郎の執拗^{しつあう}な戀に驚いて、ツイ一昨日、

芝の遠い知合を辿^{たど}つて逃げて行つたことまで明かになつたのです。藤助と岩根半藏の密談を聴く機會のあるのも、後で思ひ合せると跡部滿十郎で、半藏が福島嘉平太殺しを思ひ止つて三千兩を山分けにする氣になりつゝあることを見抜いたのも跡部滿十郎でした。

跡部滿十郎にしては、事件の當夜、夜中に飛出して狸^{まみあな}穴へ行き、岩根半藏の家から槍を持出して、怪し火の矢を飛ばし、藤助に合圖した上、手筈の通り運ぶのは何でもなかつたのです。

それを岩根半藏の仕業と思ひ込んで、後始末をした藤助にも、何の不思議ありません。

×

×

×

跡部満十郎はその日の内に縛られました。

「どうして、あの野郎がそんな馬鹿なことをする氣になつたらう」
ガラツ八の驚きの前に、

「人の心の恐ろしさだよ」

平次はさう言ふより外になかつたのです。

四十男の跡部満十郎が、お頼よりを自分のところへ引取るために氣
違ひ染みた情熱に打ち負まかされて、人間の思ひ付く一番タチの悪い
罪を犯したのでした。

「親を殺して娘を手に入れる——なんて事をしやがるんだらう」
とガラツ八。

「だから罰ばちが當つたのさ。それに比べると娘を手に入れたさに、

親に仕送りをする八五郎の方がどんなに可愛らしいか解らない」

「親分」

「心配するな、賣屋のお勘つ子を張つて、毎日にまめ豆を買つてやる事までチャンと見透しだよ」

「親分、そんな馬鹿なツ」

「その方が餘程人間らしくていゝよ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ」

平次は漸く笑顔を見せました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第八巻 地獄から來た男」同光社磯部
書房

1953（昭和28）年7月10日發行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年5月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年2月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

竹光の殺人

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>